

協を図ることはすでに知られている [Gandhi 2008]。本書は既存研究が、恣意的に抑圧する「支配集団」と力を持たない「被支配集団」の二者間対立の構図に留まっていることを批判し、自由以外にも包括性や応答性といった概念が政治体制分析に重要であることを示したが、この包括性や応答性という体制の性質は、本書の事例から見ても、あくまで政府が許容する範囲内に留まっていたと見ることができないのではないかと²⁾。さらに、著者の定義では、包括性や応答性を実現するためのアリーナである協議の場では、政治的自由やメディアの独立といった自由主義的制度的存在が前提とはされていない (p.29)。事実、マレーシア政治に自由主義的制度的欠如していることが野党や市民社会からの批判的的となってきた。こうした条件の下では、政府が主導する協議は、一般的に政府に大きく有利なものになりがちである。

以上を考慮すれば、本書が提示した協議・相互主義的制度的は著者が批判する既存研究の準権威主義体制論とかなり近い概念であり、準権威主義体制論を構成する主要な制度的の1つとして見なすことも可能ではないだろうか。事実、本書のある箇所では著者自身も、準権威主義体制論者に分類するクラウチの応答性の議論に影響を受けていると述べている。「クラウチが、『権威主義的』制度と『応答性』の並存状況によってマレーシア政治を見るのに対して、本書は『権威主義的』制度が実は『応答性』によって裏打ちされており、これが少数派や社会団体による政治活動を保障する屋台骨となっていると論じている」(p.18)。ただし、権威主義的制度的が「少数派や社会集団による政治活動を保障する屋台骨」とまでなっているのかは、実際に成立した法(制度)の実施・運用の状況を見ていく必要があるが、本書が事例研究のパートで分析する法の実施・運用の状況は、法の制定過程におけるアクターの意図の徹底した分析と比較して、少数の例外的事例からかなり意図的に著者の

議論に沿うような結論を導き出しているように思える。法の実施・運用の実際の状況については、さらなる検討が必要であろう。

しかしながら、以上のような書評者が感じた疑問は、本書の価値を低めるものでは全くない。むしろ、本書が提示した協議・相互主義的制度的という分析枠組みが、マレーシア研究の分野だけでなく比較政治の分野においても、広く議論を惹起し、アピールすることのできる魅力的な枠組みであるからこそ、書評者のような読み方も可能となるのである。本書は政治体制研究や民主化研究に重要な一石を投じた著作として今後も参照されていくことであろう。

(伊賀 司・京都大学東南アジア研究所)

参考文献

- Gandhi, Jennifer. 2008. *Political Institutions under Dictatorship*. New York: Cambridge University Press.
- Jesudason, James V. 1989. *Ethnicity and the Economy: The State, Chinese Business, and Multinationals in Malaysia*. Singapore: Oxford University Press.
- Means, Gordon. 1991. *Malaysian Politics: The Second Generation*. Singapore and New York: Oxford University Press.
- 鳥居 高(編). 2006. 『マハティール政権下のマレーシア——「イスラーム先進国」をめざした22年』アジア経済研究所。

Robert Cribb. *Digital Atlas of Indonesian History*. Copenhagen: NIAS Press, 2010, DVD with 487 maps + 80p. user guide.

2001年の夏のこと、インドネシアでの調査を終え、夜行便で関空に向かう途中トランジットでシンガポールに寄った。チャンギ空港の本屋を覗いたところ、運よく噂に聞いていた本を見つけた。前年末に出版された Robert Cribb の *Historical Atlas of Indonesia* (Curzon Press) だ。バラバラめくって拾い読みをする。内容が多岐にわたり、なかなか

2) さらにいえば、包括性や応答性を求める少数派や野党の声は、政府の許容度を越えたときが1987年10月の国内治安法に則った一斉逮捕行動(オペラン・ララン)であったといえるだろう。

面白い。関連する地図を同一ページないし見開きページに収めるためだろう、縦が約30センチ、幅が25センチと大判だ。カラー刷りの地図を沢山載せる必要から、光沢のある厚い紙を使用している。おまけに表紙の装丁は3ミリはあろうかという厚紙だ。重い！ 携行の荷物はすでに嵩張り重かったが、この本は躊躇なく購入した。今回書評する「本」の印刷版の元本で、書評対象は文字通り印刷版のデジタル版を成す。もちろん、アナログをデジタルにただけのものではない。使い勝手が違う。内容の改定はいかほどか（書評第Ⅰ部）、使い勝手はどんなものか（同第Ⅱ部）——このあたりが、以下の書評で注目するところとなる。まずは内容紹介から始めることにしたい。

Ⅰ デジタル・アトラスの内容

インドネシアに関する地図帳として名高いものに、1938年刊行の*Atlas van Tropisch Nederland*がある。オランダ領東インドの自然、地理、気候、植生、汽船連絡網、教育、植民地史などを地図を用いて概観したあと、東インドの島ならびに行政区域ごとの詳しい地図が続く。地図帳のサイズは縦45センチ、横35センチで、地図の説明以外の記述はない。また原題が「熱帯オランダ地図帳」とあるとおり、東インド以外に、当時のオランダ領アンティル諸島（カリブ海）とスリナム（南アメリカ）が含まれていた。

この本が出版されてからすでに60年、歴史家であり製図家でもあるCribbにより準備されたのが、『インドネシア歴史地図帳』ということになる。植民地期の「地図帳」の地図は見開き31葉、そのうち20葉には複数枚の地図ないし部分地図が含まれていた。他方「歴史地図帳」では全部で地図が327枚、セクションごとに歴史的記述があり、関係する地図が挿入されている。総数256ページで、うち索引47ページ、文献リスト13ページだ。全てを一人で仕上げたのだから、なんとも畏れ入る。この本を取り上げたFreek Colombijnが、書評[2001]の冒頭で「この仕事に関して頭に浮かぶ言葉がひとつあるとすれば、それは感謝だ。なぜなら全てのインドネシア研究者は、Robert Cribbが丹精込めて作り上げた、正確で多くの分野をカ

バーする地図帳にとてつもない感謝の念を覚えるだろうからだ」と述べているのも頷ける。どれだけ多くの分野をカバーしているかは目次にみとれる。紙幅が高むが、地図帳の全容を伝えるのに役立つと考え、以下に目次を再録しておく。

Introduction

Maps of the Past

Earlier Atlases

Terminology and Spelling

Basic Geographical Information

Chapter 1. Landscape and Environment

Moving Continents and Fiery Mountains

Earth, Wind and Water

Ecological Change

Chapter 2. Peoples

The Origins of Ethnic Diversity

- Language

- Literacy

- World Religions

Migration and Ethnicity

Cities and Urbanization

Population

Chapter 3. States and Politics until 1800

The Earliest States

- Sumatra and the Malay Peninsula

- Java

- Bali and Nusatenggara

- Borneo (Kalimantan)

- Sulawesi and Maluku (The Moluccas)

- Imagining the Archipelago

Europeans in the Archipelago

Chapter 4. The Netherlands Indies, 1800–1942

Conquest and Annexation

- Java

- Sumatra

- Borneo

- Eastern Indonesia

Administration

Government, Society and the Rise of a National

Consciousness

Chapter 5. War, Independence and Political Trans-

formations, 1942–1998
 Occupation and Revolution
 Tension and Conflict in the Republic, 1950–1966
 The New Order
 The End of the New Order
 Foreign Relations
 East Timor
 Maritime Boundaries
 Chapter 6. The Reform Era, 1999 to the Present
 Elections
 Decentralization and Secession
 Ethnic and Religious Conflict
 Natural Disasters
 Borders

上の目次は、実は印刷版ではなくデジタル版のものだ。そうでなければ、第6章が2000年刊行の本に入っているのはおかしい。この点が、印刷版とデジタル版にみるもっとも大きな違いで、それ以外では両者の内容はほぼ重なる。なお、第5章までの内容は、目次抜きで前記 *Colombijn* の書評でも紹介されており、興味のある方はこれを参照されたい。

印刷版から10年、どうしてデジタル版を出すことになったのだろうか。ひとつには、改定の必要に迫られたということがあるだろう。1998年のスハルト政権崩壊後、インドネシアでは民主化と地方分権化の進展がみられ、それまでよりも選挙がより公正に行われるようになり、さらに行政単位の分立により州や県の数が増大し、東ティモールが独立した。当然のことながら、現代インドネシアを理解する上で重要なこれらの変化は、印刷版では扱われていない。それにしても、なぜデジタルなのか。

デジタル版に付された説明によると、印刷版は高価であり、ペーパーバック版も出版されなかったため、教材として使うのが難しいとの落胆の声が多く聞かれたことがあったという。他方、改定版を出すにしても、紙媒体に依存するかぎり当然価格の問題に対処することはできない。内容面で両者の大きな違いはというと、なによりも160枚もの地図が追加されたことだ。このことから、価

格を抑えるために、改定版はデジタルにする必要があったことが窺える。なお、2012年11月末にジャカルタのスカルノ＝ハッタ空港の書店、Periplusで見かけたデジタル版は47万ルピア、当時のレートで日本円にしておよそ4,000円ほどだった。印刷版元本は絶版のため、これと比較のしようがないが、インターネットでは古書として当然これよりはるかに高い価格で取り引きされている。

新規地図160枚のうち90枚強は第6章に使用され、残り約70枚が第5章までの部分に新たに追加された地図だ。後者の地図には、既存の章・節をより充実するために増やしたもの、2000年以降の変化を扱ったことによるもの、新しい節を立てたことにより増えたもの等がある。付言すると、印刷版で使用されている地図に関連して、必ずしも新しい地図が付け加えられてはいない。たとえば第2章の *Cities and Urbanization* で、ジャワ島ならびにインドネシア他地域における人口20万以上の都市が1990年の地図で示されているが、2000年センサスに基づく地図が加えられているわけではない。

デジタル版に追加された第6章は、印刷版が編集された時期以降の時代、政治的にはスハルト政権崩壊後から「現在」(2007～09年頃)までを扱う。「改革の時代」と呼ばれ、既述のように民主化と地方分権化が進んだ。これとの関係で1999、2004、2009年の国政選挙と2004、2009年の大統領選挙の結果が22枚の地図を用いて説明されている。これに続く節が地方分権化で、東ティモールの分離独立やアチェにおける分離運動の説明のあと、州の分立(地図2枚)や県の分立(地図53枚)について、主として1999年と2007年の対比で解説している。これら以外に3つの節(前掲英文目次参照)が設けられてはいるが、掲載地図の多さ(第6章の地図の85パーセント)から分かるように、この章で圧倒的な注意が払われているのは選挙結果と行政単位の分立である。

II デジタル・アトラスの体裁と使い勝手

上でデジタル版と言及してきたのは、実際には80ページの小冊子とDVDから成り、ケースに収納されている(ただしスカルノ＝ハッタ空港で売

られていたものは、両者をたんにビニール・ラップで包んであるだけだった)。小冊子はDVDの利用者ガイドブックで、これと同じ情報はDVDにも含まれている。以下では、デジタル・アトラスのことをDアトラスと記す。DVDは最終製品で、購入者はこれに修正等を加えることはできない。しかしデジタル版購入者は、厚紙ケースに添付された登録番号を入力し、Dアトラスのウェブサイトにログインすることにより、修正・追加事項等の新しい情報を閲覧でき、登録後はDVDをセットせずに、ウェブサイト上のDアトラスに直接アクセスすることができる。

全ての地図は、タイトルないし地図そのものをクリックすると、画面に独立して表示される。デジタル地図ならではの特征として、表示された地図を印刷し、あるいはPDFやJPEGのファイルに変換することも可能だ。Cribbと出版社の英断として高く評価されるのは、出典を明記するとの条件で、講義、セミナー、パワーポイントを用いてのプレゼン等において、地図を転用することを無制限に認め、ワーキングペーパーなどの非刊行物では4枚まで、刊行論文・書籍についても3枚までの地図の転用を認めていることだ。ここには、Dアトラスをなるべく「オープンソース」にしたいたいのCribbの意思を読みとることができる。なお、DVDの売買・譲渡は可能で、登録変更をする限りウェブサイトへのアクセス権も移動する。ただしDVDの借用者はウェブサイトにはアクセスすることはできない。

DVDの中身は以下のような構成を持つ。DVDをセットしトップページの頭をみると、Home, Guide, Chapters, Maps, Extras, Updates, Search, Loginが並んでいる。ページの右端にRegisterがあり、これをクリックするとウェブサイト登録のための指示が出てくる。Dアトラスは、登録なしでもDVD上でアクセス可能だが、当然修正・追加事項は閲覧できず、後述のSearchも使えない。Guideは小冊子の利用者ガイドブックの内容に準ずる。ChaptersはDアトラスの本体で、章、節、項の目次一覧が示され、当該部分をクリックすると目指す場所に飛ぶことが可能だ。Mapsでは、Dアトラス所収の膨大な地図の中からいかに地図を探すかについ

て、複数の方法が説明されている。そのひとつはSearch indexesから入るもので、indexesには地名、トピック、時代、地図タイトルの4種がある。Extrasには、インドネシアや東南アジアの白地図、植民地時代の学校用地図帳掲載の地図（具体的にはW. van Gelderの*Schoolatlas van Nederlandsch Oost-Indië*, 第10版, 1909年刊行からのもの）、東南アジアやインドネシアの歴史地図を所蔵する世界の諸機関の紹介とリンク先などが挙げられている。Updatesでは、DVDにいつ、どのような修正・追加が施されたかをチェックできる。Searchは、Dアトラス内の検索手段のひとつで、これをクリックするとGoogleの窓が開き、これによって地図やテキストについての情報検索をすることが可能だ。Loginからは、Dアトラスのウェブサイトに入ることができる。

肝心の使い勝手だが、なにより気になるのはChaptersの使い勝手がよいかどうかだろう。Chaptersのトップページにある章・節・項の一覧から関心のある箇所、たとえばChapter 2をクリックする。開かれた画面の真ん中には歴史的記述が位置し、カーソルを動かすと適宜関係する地図が現れてくる。画面の左側には章タイトルが縦に並び、右側には第2章に挿入されている地図のタイトルが挿入順に並ぶ。歴史記述を読むのを途中で止め、地図タイトル欄から興味を惹かれた地図を選び、それをクリックして該当箇所に飛ぶこともできる。同様に、左側の章タイトル一覧から違う章に飛ぶことも可能だ。やや不便なのは、左には章タイトルしか掲載されておらず、節や項がないことで、節や項を調べるためには章タイトル一覧の一番上にあるContentsをクリックし、目次で確認する必要があることだ。しかしこれを除けば、Dアトラスはきわめて使い勝手のよい地図帳だといえる。

まとめとして、情報がアップデートされた以外に、Dアトラスは明らかに高い利便性を有している。Dアトラスではアトラス内を自由に移動することができ、「情報検索」を目次と索引に頼る印刷版と違い、これを迅速かつ多様に行うことができる。もちろん地図を印刷でき、PDFやJPEGのファ

イルに落とせるのは嬉しい。出張などに際して重い地図帳を抱えていく必要がないのも有難い。適宜、修正・追加が施され、それを閲覧できるのも印刷版にはない魅力だ。ただし発売から2年半ほどが経ったが、この間、実際に修正・追加されたものはそれほど多くはない。UpdatesのChanges logを確認すると、2013年3月現在で2010年6月に3件、2011年8月に5件の修正ないし追加があったのみであり、2010年センサスの結果はもちろんのこと、2000年センサスの結果さえ十分に利用されてはいない。

内容面で「ないものねだり」をすると、オランダ時代の地図帳にはスマトラのプランテーションやジャワ島の水田、灌漑施設を示す地図が掲載されていた（一部Dアトラスにも転載されている）。しかしDアトラスには農業や森林、生態関係の地図が少ない。とくに独立後のものが極端に少ない。MapsのSearch indexesのトピックにeconomyが欠如しているように、経済の取り扱いも限定的だ。

印刷版では、同一ページないし見開きページ上で複数の地図を同時に見比べ、広い視野で本を拾

い読みすることが可能だ。しかしDアトラスではそうはいかない。本評者を含め、依然として印刷版を好む人も少なくないだろう。とはいえ、Dアトラスがきわめて便利で用途の広い地図帳であることは疑いが無い。GuideのIntroductionの最後に、Cribbは「デジタル・アトラスは（著者と利用者の）共同作業だ」と利用者の注意を喚起している。つまり利用者から地図帳の改善点について沢山のフィードバック（UpdatesのFeedbackから可能）があつてこそ、Dアトラスはより豊かで便利なものに発展するということだ。Dアトラスが多くの利用者を獲得し、様々なフィードバックがもたらされ、デジタルである利点が活かされることによって、共同作業が大いに進展することを期待したい。

（加藤 剛・総合地球環境学研究所）

参考文献

- Colombijn, Freek. 2001. The Historical Atlas of Indonesia. <http://www.iias.nl/iiasn/26/regions/26SEA6.html>（アクセス日 2012年12月12日）